HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大学における留学生と日本人事務官の会話の微視的分析 ： オーバーラップを手がかりに
Author(s)	富田, 麻知子
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 7, 1-15
Issue Date	2003-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45634
Type	departmental bulletin paper
File Information	BISC007_001.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学留学生センター紀要　第７号　(2004) [研究論文]

大学における留学生と日本人事務官の会話の微視的分析[1)]

－オーバーラップを手がかりに－

富　田　麻知子

要　旨

本稿では、実際のコミュニケーション場面での第二言語話者の言語使用の実態を明らかにすることを目的とし、日本のある大学の事務室で収集した留学生と事務官の自然会話を、オーバーラップ（発話の重なり）を手がかりに記述分析した。会話の微視的分析を行うため、分析手法として会話分析 Conversation Analysis の手法を用いた。

今回の分析によって、相手の発話の途中で話を始めることが、会話の進行上の障害になるのではなく、話し手と聞き手の役割を同時に果たしながら会話を進行させていく方法の一つである可能性が示唆された。また、発話だけでなく言語行動全体の分析対象を通じて、Ｌ２話者であっても母語話者であっても、参加者としてお互いに協同で会話を作り上げていく実態が明らかになった。

〔キーワード〕第二言語話者、自然会話、オーバーラップ、会話分析

1.　はじめに

これまで日本語教師が学習者の日本語運用能力を考える場合、教室活動における学習者の言語行動のみに注目していたのではないだろうか。教室という場は、教師が会話の枠組み（例えば、会話の目的、場面など）をあらかじめ設定し、学習者を絶えず評価対象とみなしている非日常的な会話場面である。さらに、このような言語使用環境下での学習者の運用能力を評価する際、「目標言語を話す母語話者＝理想的な話者（an idealized native speaker）」、「第二言語話者（以下、Ｌ２話者）＝コミュニケーションの能力において不完全な話者（an deficient speaker）」（Firth and Wagner 1997）という前提により、母語話者教師の内省や経験知が評価の基準となっている。このような環境下での学習者の言語行動のみに注目した教師の評価は、あくまでも教室活動での到達度として評価であり、教室

のソトでの言語行動を反映した評価とはいいがたい。

言語教育の目的が学習言語の運用能力の育成だとすれば、教室活動での学習者の言語行動に加えて、実際のコミュニケーション場面での言語使用の実態を理解した上で、教授活動を検討する必要があるのではないか。

ネウストプニー（1995）では、「最近までは、実際に、外国人がどのように言語を使用しているか、体系的に調査されてこなかった（ネウストプニー 1995：186)」として、外国人による日本語使用の実態を研究する意義を唱えている。また、話し手がすべて母語話者である「母国語場面しか教育の目標としてこなかったのはあまり現実的な態度ではない（ネウストプニー 1995：187)」として、外国人話者が参加している場面である「接触場面」の特色を明らかにする必要性を唱え、外国人話者と母語話者の言語使用の傾向に焦点をあてた研究を行っている。しかし、ネウストプニー（1995）に代表される、実際の会話場面におけるＬ２話者の言語行動の分析を行った先行研究では、実際の会話場面のデータを分析対象にはしているが、それぞれの発話を会話の文脈から切り離してしまい、個々の発話のみの分析から話者の言語使用の傾向を示すにとどまっている。実際の会話場面を観察すると、会話は個々の発話が積み重さなり、互いに関係しあいながら会話の流れを作りあげていくものである。このため、Ｌ２話者の日本語使用の実態を明らかにするためには、その場その場で起こる具体的な会話データ一つ一つを、文脈から切り離すことなく観察することが重要である。

実際のコミュニケーション場面の会話を分析対象とした今までの研究の中で、参加者たちがお互いに協同で作り上げる相互行為として会話を捉え、それぞれの発話を、会話の流れの中で微視的に分析考察を行った研究は少ない。日本語母語話者間の会話を、会話分析（Conversation Analysis）の手法で記述分析した研究として、Tanaka（1999)、Hayashi, Mori and Takagi（2001）があげられるが、Ｌ２話者と母語話者間の自然会話を分析対象として、微視的に分析を行った研究はほとんどない。

そこで、本稿では、Ｌ２話者と母語話者のコミュニケーション場面の自然会話を、会話の流れの中でのそれぞれの言語行動の位置づけに注目しながら、会話の当事者双方の言語行動を詳細に記述分析していく。

このように、学習者が学習言語をコミュニケーションの手段として実際に使用している場面に注目した研究を行うことにより、学習者の実際の言

語活動を考慮した教室活動の実践のための基礎データを提供できるものと考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、自然会話におけるL２話者の言語使用の実態を明らかにすることである。ビデオ撮影した大学の事務室での留学生と事務官の自然会話を分析データとし、特に発話の重なり部分（オーバーラップ）に注目して、会話分析の手法で記述分析する。さらに、非言語行動はもとより、Goodwin & Goodwin (1996)に代表されるアーティファクト[2]も視野に入れた分析、考察を行う。具体的には、留学生と事務官の会話の際に用いられる書類なども会話を作り上げていく際の要素として対象に含め、留学生と事務官との会話がどのように作り上げられていくのかを明らかにすることを目的とする。

3. データ

本稿で分析するデータは、大学の留学生業務を担当している事務室に来室した留学生と事務官との自然会話を録画したものである。データ中の事務官は、留学生と会話をするとき、書類の名前などの専門的な用語を英語で提示するとき以外、日本語を用いている。留学生は、大学に在籍中の学部生、大学院生、短期留学生、研究生であり、国籍も日本語学習歴（初級クラス受講中～日本語専攻）[3]も様々である。

データ収集の前に、事務官と留学生双方に、本稿への協力を確認するための同意書への署名を依頼し、同意を得てから撮影を行った。会話の録画は、三脚上に設置したデジタルビデオカメラ（SONY Handycam DCR-TRV900）を、事務官と留学生との会話の様子全体が撮影可能な事務室内に据え置いて行った。音声は事務官の机の上においた外部マイクを通して収集した。

本稿のデータは、会話の参加者に同意を得てからの撮影であり、またビデオが設置されているという非日常的な事務室での会話場面の撮影という二つの点において、会話の当事者への影響を考えると全くの自然会話データとはいえない。しかし、従来の多くの研究で分析対象とされてきた実験的場面での会話データと比べて、会話の当事者の必要性に応じて生じた会話であるという点、また会話の開始と終了にあわせて録画の開始と終了を

決めるのではなく、撮影されていることをできるだけ意識させないように、撮影を開始してからその日の撮影を終了するまで途中で止めることなく撮影し続けているという点において、より実際のコミュニケーション場面での会話をとらえたデータといえる。

4. オーバーラップ

日本語の母語話者とＬ２話者の実際の会話を観察してみると、日本語学習用教科書に出てくるモデル会話のような、一つの発話順番（ターン）に一人の話者という会話は少なく、以下のように両者とも相手の発話に自分の発話を重ねている例が多く見られる。

会話例１

ＲはＬ２話者（留学生）、Ａは母語話者（事務官）を表し、左かぎかっこ［は、発話の重なりが始まることを表す。(詳しいトランスクリプトの記号については、12－13ページを参照のこと)

37Ａ：いつ帰りましょうかってことを(.)来週まで
38Ｒ：来週ま[で
39Ａ：　　[うん[うんうん(.)わかったら[:教えて[ください
→40Ｒ：　　[あ　　[わかっ[はい　はいわかりました

江原・好井・山崎(1984)、好井(1991)は、日本語母語話者同士の会話に見られる発話の重なりに注目した分析を行い、現在の話し手が話している最中に、次の話者が話し始めることを「割り込み」と定義し、「割り込み」を「現在の話し手の発言権を侵害し略奪する（江原・好井・山崎 1984：165)」発話と捉えて分析を行っている。しかし、本稿のデータを分析してみると、量的な差があるとはいえ、発話の重なり部分がほとんどすべての会話で観察されることから、そのすべてが「話し手の発言権の侵害」になっているとは考えるのは早計であろう。そこで、本稿では会話例１の40でのＬ２話者Ｒの発話で見られるように、一見むやみに割り込んでいるように見える発話の重なりが、相手の発話を聞かずに自分の発話を勝手な場所にはさんでいる事象なのかという疑問を発端に、すべての「相手の発話に重なっている発話」をオーバーラップと定義し、Ｌ２話者のオーバーラップ

を手がかりにデータの分析を行う。

データ中のオーバーラップの観察から、以下の3種類の場所でオーバーラップが始まっていることがわかった。

①相手の発話順番が終わったところで順番取りを行い発話を始めたが、相手の発話がその後も続いたためにオーバーラップとなったもの

②相手の発話の途中で挿入される短い「あいづち」[4]的な発話、または、相手の発話に間(小さなポーズ)、いいよどみ、繰り返しがあった場合に起こるオーバーラップ

③相手の発話の語の途中から重なりが始まっているオーバーラップ

①と②に分類されたオーバーラップは、分析したデータ中の留学生、事務官双方の発話中に見られるオーバーラップ全体の大半（95%程度）を占めていた。これらのオーバーラップは、①では相手の発話の順番交替に適当な場所、②では句や節の後、または間、いいよどみ、繰り返しの後で始められており、オーバーラップの開始位置に規則性が見られる。これらのオーバーラップの分析から、相手の発話に対して適切な発話を適当な場所ですることにより、会話が進行している様子が観察された。

本稿ではトランスクリプトを見ただけでは、オーバーラップの開始位置に規則性が見られず、相手の発話に割りこんでいるように見える「③相手の発話の語の途中から重なりが始まっているオーバーラップ」について考察をすすめ、L2話者の言語使用の実態を把握するための手がかりとする。分析の際には、先行研究で分析対象とされていなかった非言語行動、アーティファクトも含めた言語行動全体を見ることにより、会話の参加者がどのようなリソースを使って、会話を進めていくのかを見ていく。

5. 分　析

本稿の分析データ中のオーバーラップは、「4.オーバーラップ」でも述べたように、三つの場所で観察された。その中でも、③の「相手の発話の語の途中から重なりが始まっているオーバーラップ」は、①と②のオーバーラップとは異なり、トランスクリプトを見ただけでは相手の発話を聞かずに始められたように見える。そこで、本稿では③の場所で始まるオーバーラップの事例をあげて、なぜその場所でオーバーラップが起きたのかを微視的に分析する。また、オーバーラップの生じている会話の流れ全体を分

析することにより、いかにＬ２話者と母語話者がお互いに言語行動に注目し、会話を進行させていくのかも分析する。

まず、会話例２のオーバーラップの事例を見ていきたい。この事例では、15に留学生Ｓのオーバーラップが見られる。(トランスクリプトの15の→の部分)　ここで、なぜ留学生Ｓは事務官Ｂの「はる」という発話を聞いた後で、「はい」という発話を始めたのであろうか。トランスクリプトの発話を見ただけでは、相手の発話内容に関係なく割り込んでいるオーバーラップに一見見える。そこで、非言語行動を含めた言語行動全体を分析対象とし、留学生がいかに様々なリソースを使って会話をしているかを明らかにしていく。

会話例２

事務官Ｂが留学生Ｓ（国籍：フランス　日本語学習歴：初級コース受講中　性別：男）に春休みの日本語補講のクラスに参加するかどうかを問い合わせている会話である。

13Ｂ：P----------
13Ｂ：ああと：(.)日本語の補講は出ますか
13Ｓ：P----------
14　(1.2)
14Ｂ：P---S----
14Ｂ：○○○○○
14Ｓ：P--------
15Ｂ：S----------
15Ｂ：○○[●●　　↓
15Ｂ：はる[やすみ]　[出たい](.)ん(.)そう授業[です]　じゃこっちも出るってことですね
15Ｓ：B----------
→15Ｓ：　[はい　]はい[授業？]　　[行き]たい　　はい

ここでは、15の事務官Ｂの「はるやすみ」という発話の「はる」の後で始めた留学生Ｓのオーバーラップを分析する。このオーバーラップの開始場所は、発話の順番交替にふさわしい位置ではない。また、この会話例の前のシークエンス(１～12)の二人の会話において、「春休み」についての

話はしていないため、「春」と聞いただけでは後に続く相手の発話内容を予測することはできない。

では、なぜここで留学生は「はる」という発話を聞いた後で、「はい」という発話を始めたのだろうか。

まず13で、事務官Bが日本語補講のスケジュールに関する書類を留学生Sに見せながら、「日本語の補講は出ますか」と質問する。そして、「出ますか」という発話の後すぐ（14の1.2秒の沈黙の間に）、書類の一部を左手の指でなぞって指し示す。（トランクリプトの○で示されている）そして、なぞる動作の始まりに少し遅れて、視線を書類から留学生Sにむける。（トランスクリプトでは、書類への視線は大文字のPで、留学生への視線は大文字のSで示されている）ここでの事務官Bの視線の動きは、13での質問の後、留学生Sからの返答を少し待ったが返答が続かなかったため、視線を留学生に向けることによって、次の話者が留学生であることを示しているように見える。

一方、留学生Sは13の事務官Bの「ああと：」の発話で事務官Bの持っている書類に視線をむけた後は、ずっと書類を見つづけたままで、14での事務官Bの視線に対して視線を返していない。また事務官Bの質問に対する応答もしていない。

そこで、事務官Bは15で再度順番取りを行い、「はるやすみ」という発話を始めている。そして「やすみ」のところで、その前の14での1.2秒の沈黙とともに始まった書類を左の指でなぞる動きをやめて、その後すぐ左手の指を小さく上下に振る。（トランスクリプトの●で示されている）その上下の振りに呼応するように、留学生は「はい」という発話を始め、事務官の「やすみ」という発話が終わってからすぐ、また首を縦に振りながら「はい」という発話を繰り返す。

オーバーラップした留学生Sの「はい」という発話は、1.2秒の沈黙の前の事務官Bの質問「日本語の補講は出ますか」に対する返答である。つまり、留学生Sは事務官Bの指の動きという非言語行動によって、書類のある部分に焦点をあて、13の質問を理解し、その非言語行動に呼応するように発話を始め、質問に対する応答をしたと考えられる。

ここで、再度15の事務官Bの「はるやすみ」という発話を見ていきたい。事務官Bは、沈黙の後に始めた「はる」という発話の後で、留学生Sの「はい」という返答と考えられる発話が始められたことをうけ、自分の発話順

番の途中で発話をやめている。(「はるやすみ」という発話の後、何も続けていない) このことから、事務官Bの「はるやすみ」という発話が、質問ー応答の隣接ペア (adjacency pair、 Schegloff and Sacks 1973) への挿入であり、その前の質問に追加された説明の発話であったと考えることができる。また、「はるやすみ」という発話の後、再度13での「出ますか」という発話を繰り返すような「出たい」という発話をしていることからも、「はい」という留学生の応答に対して再確認する発話をしたと考えられる。

このように、留学生と事務官の会話を非言語行動を含めた言語行動全体の中で見ることにより、一見相手の発話を聞かずに始められたオーバーラップと考えられる発話も、指、首の動きといったリソースをもとに、相手の発話内容を理解し、発話の順番交替を行っていることが観察される。また、このようなオーバーラップをすることにより、相手の発話の理解を示すことを可能にしていることが観察される。

次にあげる会話例3でのオーバーラップの事例は、会話例2と同様、事務官Aの発話 (「今どこかいくの」) の途中で、留学生Rがオーバーラップを始めた例である。(トランスクリプトの60の→の部分) 60のオーバーラップがなぜ語の途中で始まったのか、またさらに、オーバーラップの後に続くシークエンスの中で、いかに留学生と事務官が互いに相手の言語行動に注意を向けながら、会話を進行させ、作り上げていくのかを分析していく。

会話例3

60から始まるシークエンスの前で、事務官Aが留学生R (国籍:マレイシア　日本語学習歴:初級コース修了　性別:男) に書類への署名を依頼する。留学生Rはその書類が渡されるのを事務官Aの横で待っている。留学生Rの手元には、事務室に持ち込んだ別の書類がある。

60A:P-----R-------
60A:今どこ[かいくの
R:P----------
→60R:　　[どこ=((事務室のドアの方を指差す))
61　(2.0)
61R:A--[P----------
61R:　[((Sが書類をAに見せる))
61A:R--[P----------

62A：ん？
63R：((別棟の事務室のある方向を指さして))
64A：出しにいってくるの？
65R：はい出しに
66A：じゃ[それからでいいよ
67R：　　[はいはいはい
68R：((事務室をでていく))

60で事務官Aが留学生に署名のための書類を渡そうとしたとき、留学生Rが手を少し上げたため、事務官Aの視界に留学生Rの手元の別の書類が入る。そこで、その学生Rの手元の書類を見ながら、「今どこかいくの」という発話を始める。一方、留学生Rは事務官Aの「今どこ」の後からオーバーラップする。

ここで、なぜ留学生Rは相手の発話の途中であるにもかかわらず、自分の発話を重ねたのであろうか。このオーバーラップは、相手の発話を聞かずにむやみに始められたものなのだろうか。まず、会話例2と同様、留学生と事務官の言語行動全体の分析から考えていく。

60で、事務官Aは「今どこ」と言いながら、視線を留学生の手元にある書類から留学生Rに移している。(トランスクリプトでは、視線を表すーで、留学生Rの手元の書類Pから留学生Rへの動きが示されている) この事務官Aの視線が完全に留学生Rに向けられたまさにそのとき、留学生Rは、事務官Aの発話と同じ「どこ」という発話をオーバーラップさせ、その発話の後すぐ、自分が入ってきた事務室のドアのほうを指す。オーバーラップした発話と、指差しという非言語行動での留学生Rの応答に対して、事務官Aからの発話がなかったため、その後、ドアを指差したままで、それまで手元の書類にあった視線を事務官Aに移し、事務官Aと目をあわせる。そして、さらに留学生Rは自分が手にしている書類を事務官Aに見せるという非言語行動を続ける。

60に見られる留学生Rのオーバーラップは、事務官Aの「今どこ」という発話の順番交替に適当ではない場所で始まっており、トランスクリプトの発話を見ただけでは、相手の発話に割り込み、相手の発話をただ繰り返しているようにしか見えない。しかし、オーバーラップの生じている部分

の発話だけでなく、その発話に伴う視線にも注目すると、事務官Aの「今どこ」という発話の後の留学生Rに向けられた視線に呼応するようにオーバーラップしていることがわかる。つまり、事務官Aの質問途中の視線の動きが、次の話者を選択する働きをしていると考えられる。

上記の分析から、留学生Rによるオーバーラップが、相手の言語行動全体に絶えず注意を向けている結果として、相手の視線に呼応するように始められた発話であることがわかった。

次に、オーバーラップした留学生Rの発話に続くシークエンスで、事務官Aと留学生Rがいかに互いの発話に注意を向けながら、会話を進めているかを見ていく。

オーバーラップした留学生の発話「どこ」は、質問に対する適切な発話ではなく、事務官Aの質問の「どこ」という発話の繰り返しである。また、オーバーラップした発話に続く非言語行動(事務室のドアの方向を指差す)と、二人の視線の先の書類との関係も、会話例の前のシークエンス（1～59）の内容からも推測することはできない。このため、62の事務官Aの語尾の上がった（トランスクリプトの？で示されている）短い「ん」という発話は、その前の61での留学生Rの非言語行動による応対への理解ができなかったことを示していると考えられる。

事務官Aの「ん」という発話の後、留学生Rは今まで書類に向けていた視線を事務官Aに向け、右腕を伸ばし、事務室のドアとは反対方向の、書類を持ってむかう先である別棟の事務室の方向を指し示す動作を行う。この動作から、事務官Aの「ん」という発話の意味、すなわち留学生Rの非言語行動による応対を事務官Aが理解していないということを、留学生Rが理解していることがわかる。

63の留学生Rの指差しの動作の後すぐ、64で事務官Aはうなずきながら（トランスクリプトの下線で示されている)、留学生の手元の書類とその前の留学生Rの非言語行動の関係を示すような確認の質問「出しにいってくるの」という発話を始めている。この事務官Aの発話から、留学生Rの60から63までの言語行動が、質問(「今どこかいくの」)に対する応答であったということを理解していることがわかる。また、事務官Aの「出しにいってくるの」に対して、留学生Rが「はい」と応答し、事務官Aの発話に対する承認を行っている。ここでは、事務官Aも留学生Rも互いの言語行動を理解しているが示されている。

会話例２と３の分析により、相手の発話の途中で話を始めることが会話の進行上の障害になるのではなく、オーバーラップをすることによって、話し手と聞き手の役割を同時に果たしながら、会話を進行させていく方法の一つである可能性が示唆された。また自然会話において、Ｌ２話者であっても母語話者であっても、参加者としてお互いに協同して会話を作り上げていく実態を観察することができた。

さらに、分析対象を発話だけではなく、非言語行動、さらにはアーティファクトを含む言語行動全体とすることにより、Ｌ２話者である留学生も母語話者である事務官も、発話以外の様々なリソース、たとえば視線、首や手の動き、手元の書類などを基に会話を構築していることが観察された。

6. まとめ

これまで日本語教育の現場では、母語話者教師の内省や経験知に照らし合わせてＬ２話者である学習者の教室活動での言語行動を評価し、それに基づき教授活動を検討してきた。しかし、言語教育の教授場面は、あらかじめ教師側で会話の枠組みが設定され、また「評価する者」－「評価される者」という設定で会話が進行する特殊な会話場面である。今回の分析において観察されたように、実際のコミュニケーション場面では、母語話者であってもＬ２話者であっても、一人の「日本語話者」として自分自身の必要性に応じた目的で会話をしている。

言語教育を学習者の言語使用の実態に即した形で行っていくためには、本稿で検討してきたような、実際の会話場面の分析によりＬ２話者の日本語使用の実態を明らかにすることが、今後必要となってくるであろう。そのためには、会話中の発話のみならず、会話を構築するすべての要素、すなわち非言語行動やアーティファクトも分析対象とした分析が必要である。

このような分析が、今後の日本語教育に学習者の言語能力を把握し、教授活動を検討していく上での基礎的なデータを提供することになると考える。

今回の分析では、オーバーラップの開始位置に注目したが、今後は、さらにＬ２話者の日本語使用の実態を明らかにするため、本稿で①②③に分類したオーバーラップそれぞれの事象が、会話のシークエンスの中でどのような働きをしているのかに注目した分析を進めるとともに、オーバー

ラップ以外の視点からの分析を進めていきたい。

注：

1）本稿は、北海道大学大学院国際広報メディア研究科2001年度修士論文（富田　2002）の一部である。

2）アーティファクトとは、道具、文字、記号など人為的に作り出され、人びとによって利用されている人工物を指す。

3）学部生は大学入試の際、日本語能力試験一級および私費外国人留学生統一試験の受験が受験資格の一つとなっている。大学院生、研究生の場合、各学生の研究分野や研究内容によって大学生活における日本語使用頻度が異なり、言語レベルへの影響が考えられる。データ収集のために、各留学生の日本語レベルを評価する試験等は行っていない。

4）Clancy, Thompson, Suzuki and Tao(1996、以下Clancy et al. 1996)では、'reactive tokens'を「一人の会話者の話し中になされる、聞き手であるもう一人の会話者による短い発話（Clancy et al. 1996:356、邦訳 筆者）」と定義し、1) backchannels、2) reactive expressions、3) collaborative finishes、4) repetitions、5) resumptive openersに分類した。本稿の「あいづち」的な発話は、その５つの分類のうち、backchannels（興味や理解を示す、語彙とはみなされないcontinuer）とreactive expressions（発話権をとらない短い語やフレーズ）に分類される発話のことを指す。

〈トランスクリプトに用いられている記号〉

A・B	事務官	
S・R	留学生	
[	発話の重なりの始め	
]	発話の重なりの終わり	
:	長音	例　う：ん[ううん]
=	発話、あるいは非言語行動のつながり	
(0.0)	沈黙の長さを秒数で示している	例 (2.3)
(.)	ごく短いポーズ	
?	語尾の音が上がっていることを示す	
(( ))	動作を示す	例　((ノック))

下線	首を縦に振りながらの発話	例　はい
↓	相手に向けた指差し（point）	
○	指でなぞる動作	
●	指の上下の振り	
―	視線（gaze） ―の前のアルファベットは、P：資料、S／R：留学生、A／B：事務官への視線を表す	

参考文献：

江原由美子・好井裕明・山崎敬一（1984）「性差別のエスノメソドロジー」『現代社会学』10(1)　pp.143-176

富田麻知子(2002)「大学における留学生と事務官の会話の質的分析－オーバーラップの視点から－」北海道大学大学院国際広報メディア研究科2001年度修士論文

ネウストプニー，J．V．(1995)『新しい日本語教育のために』大修館書店

好井裕明（1991）「男が女を遮るとき-日常会話の権力装置」山田富秋・好井裕明編『排除と差別のエスノメソドロジー』新曜社　pp.213-249

Clancy, P. M., Thompson, S. A., Suzuki, R., and Tao, H. (1996) "The conversational use of reactive tokens in English, Japanese, and Mandarin,"*Journal of Pragmatics*, vol.26, pp.355-387.

Firth, A., and Wagner, J. (1997) "On discourse, communication, and (some) fundamental concepts in SLA research," *The modern language journal*, vol.81, no.3, pp.285-300.

Goodwin, C., and Goodwin, M. (1996) "Seeing as situated activity: Formulating planes." In Engeström, Y., & Middleton, D. (ed.), *Cognition and communication at work.* pp.61-95. Cambridge : Cambridge University Press.

Hayashi, M., Mori, J. and Takagi, T. (2001) "Contigent Achievement of co-tellership in a Japanese conversation — Analysis of talk, gesture, gaze, and gesture-," in Ford, C., Fox, B., & Thompson, S. (ed.), The *Language of Turn and Sequence*, pp.81-122. Oxford.

Schegloff, E. A., and Sacks, H. (1973) "Opening up closing," *Semiotica*,vol. 7,

pp.289-327.
Tanaka, H. (1999) *Turn-taking in Japanese conversation: A study in grammar and interaction.* Amsterdam: John Benjamin.

とみた　まちこ（留学生センター非常勤講師）

Journal of the International Student Center Hokkaido University No. 7 (2004)

Overlapping talk between international students and staff at a Japanese university:

A qualitative analysis of naturally occurring conversation in Japanese

Machiko Tomita

This study examined naturally occurring conversation in Japanese between international students and staff members at a university in Japan. It investigated how interaction between second-language speakers (L2Ss) of Japanese and native speakers (NSs) was constructed with special focus on their overlapping talk. In this study, their conversation was qualitatively analyzed within the framework of Conversation Analysis.

The result of the analysis suggests that they were paying constant attention to their interlocutors' verbal cues as well as other resources available in the context where interaction took place. The present study illustrates how both the L2Ss and NSs played the roles of speaker and listener simultaneously in interaction, and co-constructed their conversation.